

男神形の善如龍王像の成立について  
— 高野山金剛峯寺所蔵「善女龍王像」を中心に —  
清水紀枝 (早稲田大学)

高野山金剛峯寺に伝来する「善女龍王像」は、弘法大師空海が神泉苑で祈雨の修法を行った際に応現し、雨を降らせた龍王を描いたものとされる(関係史料における尊名の本来の表記は「善女」ではなく「善如」であることから、以下「善如」に統一する)。冠を戴き中国風の大袖の衣をまとう男性の姿で、宝珠をのせた盤を持って涌雲に乗り、着衣の裾からわずかに龍尾をのぞかせる。背面の押紙や『高野山文書』等から、久安元年(1145)に画僧定智によって描かれたことが知られている。また醍醐寺には、建仁元年(1202)に同寺の僧深賢が本図の写本をさらに写した白描図像が伝わるほか、本図を範としたとみられる13世紀の白描図像および彩色画が伝来する。

しかし善如龍王の初出史料とみられる『御遺告』(10世紀頃)において、その姿は長さ約8寸の金色の蛇であると説かれ、平安時代から江戸時代にかけて成立した空海の伝記や絵伝は総じて、この蛇形の善如龍王像を踏襲している。また仏典中には、八大龍王をはじめ多様な龍王の名や形姿が説かれるものの、本図のような、冠を戴いた男神形の龍王の姿を見出すことはできない。近年、特に歴史学や文学の分野において、中世真言密教の龍神信仰への注目が高まり、善如龍王信仰についても研究の蓄積が進む一方で、そのイメージや図像の展開については未だ不明な部分が多い。そこで本発表では、男神形の善如龍王像の図像の起源および成立事情について、あらためて検討を行いたい。

従来、本図の着衣の形式については宋画の影響が指摘されてきたが、管見の限り具体的な影響内容や典拠に踏み込んだ研究は見受けられず、また特にその特異な形式の冠については、「王冠」や「宝冠」といった抽象的な表現にとどめられてきた。そこでまずは本図の冠の図像について、中国古代服飾史研究の成果をふまえ、宋代皇帝の冠形式の影響を明らかにする。

なお近年、中国人研究者によって、冠を戴く男神形の龍王像の成立に関するいくつかの有意義な論考が提出されている。これらの研究成果をもとに、本発表では特に、死者供養の儀礼である水陸会に用いる画像、および宋版法華經に表された図像の影響に注目したい。

愛知・瑞泉寺所蔵「伝星宿図」(南宋・13世紀)には、本図と近似する冠および着衣形式の男性が描かれるが、本来は水陸会のための画像であった可能性が指摘されている。よってまずは、こうした水陸画の日本への伝来が、男神形の善如龍王像の成立に与えた影響について検討する。

また奈良・伝香寺地藏菩薩像の胎内に納入された「細字法華經」をはじめ、宋版法華經の見返絵にも本図に近似する男神形の龍王の姿が認められる。男神形の善如龍王像が描かれた高野山および醍醐寺について、近年、法華經信仰との密接な関わりが注目されている。両寺院における法華經信仰の高まりが、新たな龍王像の成立に影響を与えた可能性について論じたい。